

— 1. 支部長挨拶 —

(社) 日本気象学会北海道支部 支部長 川津 拓幸
(札幌管区気象台長)

この度、中井支部長の後任として、第27期後期の支部長となりました川津でございます。北海道支部の発展のため、精一杯努力したいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

はじめに、3月11日に発生しました「平成23年(2011年)東北地方太平洋沖地震」とそれに伴う大津波は、東北地方から関東地方に至る太平洋沿岸域を中心に未曾有の大災害をもたらし、北海道でも太平洋沿岸域に津波による被害が発生しました。さらに、7月には前線の影響により「平成23年新潟・福島豪雨」が発生し、加えて9月には「台風第12号」により、紀伊半島をはじめ全国各地で土砂崩れや河川の氾濫等の大水害が発生し、多くの方が犠牲になりました。ここ北海道でも、この台風第12号から変わった温帯低気圧や前線と台風第13号の影響により「あわや昭和56年8月の大水害の再来か」と身構えたところでした。



ここに、お亡くなりになられた方々のご冥福をお祈り申しあげるとともに、被災された方々に心からお見舞い申し上げます。

大気科学は、地球環境問題や地域における防災対策など、私たちの社会生活と密接な関わりあいを持つ重要な学問分野です。様々な気象現象の発生を契機として、その原因を解明し防災に役立てることへの社会的要求が高まっており、私たちには、研究者としてあるいは防災を担う者として、基礎研究の推進やその成果を取り入れた防災施策の実施等それぞれの立場から国民・社会の安全・安心に寄与するとともに、そのために必要な知識の普及もより一層求められていると思います。

この一年は、昨年11月に「気象講演会」、本年1月には「特別気象講演会(サイエンスカフェ)」、7月末には札幌市青少年科学館と共に第29回気象講座「新しい気象」を開催してきました。しかし、今年の大震災や大雨災害を振り返ってみるにつけ、現象の解明へのあくなき努力と調査・研究成果の一般市民の方々や教育現場への還元・知識普及活動の重要性を痛感しているところです。

日本気象学会北海道支部では、大気科学の発展につながる施策や教育現場における人材の発掘、研究環境の整備や情報の共有などのために、さらに幅広い活動を行えるよう努力して参りますので、今後とも会員の皆様のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。